



阪神・淡路大震災の時、被災地復興のために「ガッツやK O B E」Tシャツのイラストを描き、絵本制作や個展等、絵を描くことで発信を続けるWAKKUN（わっくん）こと涌嶋克己さん。

昨年、神戸新聞の「もらった種とまいた種」という連載記事を涌嶋さんが執筆されていることを教えていただき、インターネットで見てみると、その連載第一回は、ぜひ『積木』で紹介したい！と思う記事でした。今回涌嶋さんのご了承を得て、掲載させていただきます。

## 学生時代に自問したこと

ボクは今、七〇歳になる絵かきです。（二〇二〇年当時）  
ボクは若い頃、京都の龍谷大学法学部に籍を置いていました。

彼らは「本学は視覚障害のある人に入學試験の門戸を開いている大学なのに、来年度以降、その門戸を閉ざすといわれている。本学の開学の精神からしたら、それが正しいのか？ 基本的人權のことを学んでいる法学部の諸君とディスカッションをした上で、共に門戸を開くよう、声をあげたいのだ」と訴えてきた。

教授が冷静に「それなら、このゼミの諸君に挙手で賛否を問うてもよいか？」と提案すると、乱入してきた学生たちはうなずいた。「ゼミの時間を討論会にチェンジしたい人！」の声に、手を挙げたのは一三人中、ボク一人だけだった。

「よし、多数決で決まったので、約束どおり教室から出ていってこれたまえ！」の教授の声に、一番アジっていた学生は、目に涙をいっぱいためながら声をふりしぼり、「この瞬間にも、視覚障害のあるボクの友人は、今、そこに座っている、あなた方の五〇倍、百倍の努力をし時間をかけながら法学を勉強しているのだ。心にかすかな希望をもち努力している彼らのことを、あなた方は、どう思っているのだ」と叫んだ。

ボクはうつむいたまま、彼らの顔を直視できなかった。  
彼らが部屋を出てゆき、やがてゼミがはじまったが、何も頭にはいらなかった…。

京都から神戸に帰ったボクは家で朝まで一睡もできなかった。  
一度でもボクは障害がありながらも努力している彼らのように真剣に自分の道を選び努力しながら歩いてきたのだろうか？と自問した。

そして、もし人生で彼らにバッタリ出会うって、「涌嶋さん、生きていますか？」と問われたら「オレも生きてるでエ！」と言えるだろうか？と自問し続けた…。

本当は絵が大好きなのに、学費等の理由で芸術系大学に進まなかったので、学歴がないコンプレックスで絵の道を半ばあきらめ、何の努力もしないでいる心の弱さに気づいていった。努力して勉強している彼らこ

涌嶋さんは二四回にわたる連載の中で「もらった種とまいた種」が、いろいろな場所で育って、めぐりあい、つながるエピソードを独自のあたたかい、活きた感性で語っておられます。

豊能障害者労働センターもこれまでたくさんの人から種をもらい、活動を続けてきました。事業を通じ、人と関わり合う中で私たちもまた種をまき、どこかでその種は育っているかもしれません。

「もらった種とまいた種」はそんな私たちの歩みと重なるメッセージであり、四〇周年を迎えた今年、ぜひ私たちの活動を発信するメッセージとして使わせていただきたい、と思いました。

神戸新聞の連載記事には、涌嶋さんのイラストが掲載されており、私たちは最初これをTシャツのデザインとしてぜひ使わせていただけないか、とあつかましくも涌嶋さんに電話をしました。

ちょうどその頃、涌嶋さんはアトリエの引越し作業でお忙しい時期だったにもかかわらず、

「そうか、もう豊能（とよの）さん四〇周年なんやね。よう頑張ってきたね。そういうことやったら、Tシャツの絵、描きます。」と仰ってくださいました。

まさか新たに描きおろしてただけるなんて思ってもみなかった私たちは、本当に驚くと同時に、涌嶋さんはその時々の中で受けとめたものを、柔らかい感性で絵に表現されるのだなと、あらためて感じ、私たちのことを大切に思ってくださいとお願いしている涌嶋さんに感謝の気持ちでいっぱいでした。

涌嶋さんは非常に短期間で原画を仕上げ、さらに四〇周年記念のメッセージ入りのイラストも一緒に送ってくださいだったので。

こうして今回「もらった種とまいた種」Tシャツが実現。あわせて以前にいただいた作品&山本周平（豊能障害者労働センター・スタッフ）のコラボTシャツを二種類お届けします。

## WAKKUN（わっくん）と涌嶋 克己

神戸新聞連載「もらった種とまいた種」(一) 二〇二〇年四月八日より

三回生になって親族、相続法概論というゼミを受けていたある日、突然、講義中に数人の学生が乱入してきたのでした。

その大学にふさわしい人間で、ボクは、そうではないのだと感じた…。  
そして、昨日あった出来事は、自分自身の心の宿題だったんだということにも気づいていった。

よく朝、ボクは大学を辞めることに決めた。  
徹夜して目を赤くしたまま京都に行き、教授に一晚中考えて出した結論を伝えた。

そして、その足で神戸に帰り、三宮の駅から父親の勤め先に電話を入れ、喫茶店に呼び出した。

「三年間、授業料を出してもらい、ありがとうございました」。礼を述べてから、昨日の話をし、大学を辞める決心を伝えた。三時間ほど真剣に自分の心を打ち明け、説得してゆくと、父もやがてうなずいてくれた。それからはアルバイトしながら絵を描き、いろんな人に出会い、いろんな種をもらいながら三〇代半ばになってやっとプロになってゆきました。

今なお、絵かき人生を右往左往しながら歩き続けているのですが、そんなボクがひとつだけ、はっきり言えることがあります。

あの視覚障害がありながら努力してきた人とバッタリ出会った時。「涌嶋さん、生きていますか？」と聞かれたら、「生きてるでエ！」とはつきり言い切れることです。

涌嶋 克己（わくしま・かつみ）プロフィール  
一九五〇年神戸市長田区生まれ。同区在住。画家、イラストレーター、絵本作家。八六年から個展やグループ展を開催。WAKKUN（わっくん）の愛称で知られる。

